

アニメーションによるドキュメンタリー再考

長尾真紀子

-----  
**キーワード:** アニメーション、ドキュメンタリー、アニメテッド・ドキュメンタリー  
アニメーションによる凝縮、出来事の集約的概要、歴史、想起  
-----

**内容:**

創造的なメディアであるアニメーションは、これまでドキュメンタリーを担うメディアとしては積極的に認められてきませんでした。アニメテッド・ドキュメンタリーの先行研究においても、実は必ずしもアニメーションの可能性を十分に捉えようとはしていないのです。一方、アニメーションには、生起した出来事に対して、特定の視点から意味を付与することができるだけ回避し、その出来事を構成する要素を凝縮、抽出して集約的に示そうとする、「出来事の集約的概要」の提示とも言うべき表象の在り方を示す作品があります。こうした作品は、記録映像や記録音声の利用を極力抑え、アニメーションを主軸とした表象によって、鑑賞者を出来事の内側へと導き、効果的な共有可能性や当事者性をも喚起させ得るような性質を持っており、ドキュメンタリーに求められる重要な機能あるいはその一部を手にかけていると考えられます。そして、このような表象を可能にする、物事を凝縮する力は、時間や空間を自由自在に操作できるアニメーションに本来的に備わっている、表現の自由度の高さに拠るものだと考えることができます。

20世紀半ば以降におけるドキュメンタリーや歴史学の概念の変質・拡張を基軸としつつ、従来のアニメテッド・ドキュメンタリー研究とは異なる観点に立ち、アニメーション独自の表現力に対して、「出来事の集約的概要」の提示という表象の枠組みを用いることで、現実の出来事にどのように言及できるのか、そのドキュメンタリー的機能の有意な可能性と限界、意義について考察します。アニメーションに潜在するドキュメンタリーとしての有効性は、単にアニメーションの性質に新たな理解を拓くだけでなく、いわゆるドキュメンタリーの枠組み自体の再考を促し、さらには、歴史や記憶についての再解釈の研究とも呼応するものとなるでしょう。

**主な参考作品**（時間の都合上、授業でご紹介できないものも含まれます）:

- ドキュメンタリー概念の変遷、歴史概念の変遷
  - ・ クリス・マルケル 『レヴェル5/Level Five』 1996年、110:00
  - ・ シャンタル・アケルマン 『東から/D'Est』 1993年、107:00
  - ・ トリン・T・ミンハ(Trinh T. Minh-ha) 『ルアサンブラージュ/Reassemblage』 1982年、40:00
- アニメテッド・ドキュメンタリーの先行研究 - 成果と課題
  - ・ クリス・ランドレス(Chris Landreth) 『ライアン/Ryan』 2004年、14:00
  - ・ S・プリンガス & O・ヤディン(Sylvie Bringas & Orly Yadin) 『サイレンス/Silence』 1998年、10:30
  - ・ ニック・パーク(Nick Park) 『快適な生活/Creature Comforts』 1989年、5:00
- 「出来事の集約的概要」という概念 - ドキュメンタリーの異なる可能性
  - ・ 木下蓮三 & 木下小夜子 『ピカドン/Pica-Don』 1978年、9:25  
※ インターネットに上がっている動画は、作者に許可無く編集・改変されています。
- アニメーションの凝縮する力
  - ・ マルツェッル・ヤンコヴィチ(Marcell Jankovics) 『シジフォス/Sisyphus』 1974年、2:00
  - ・ マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット(Michael Dudok De Wit) 『父と娘/Father and Daughter』 2000年、9:00
  - ・ ノーマン・マクラレン(Norman McLaren) 『隣人/Neighbours』 1952年、8:00
  - ・ イリイ・トルンカ(Jiří Trnka) 『手/The Hand』 1965年、18:00
  - ・ ピーター・フォルデス(Peter Foldes) 『飢餓/La Faim/Hunger』 1974年、11:00

- 「出来事の集約的概要」を提示するアニメーション
  - ・ ウィリアム・ケントリッジ(William Kentridge) 『流浪のフェリックス/Felix in Exile』 1994年、8:43
  - ・ セルジュ・アヴェディキアン(Serge Avédikian) 『chienne d'histoire(歴史の犬)』 2010年、15:00
  - ・ トマシュ・スイヴィンスキ(Tomasz Siwiński) 『モチャルスキの場合/Moczarski's Case』 2016年、5:15
  - ・ リシャルド・チェカワ(Ryszard Czekafa) 『点呼/Apel/The Roll Call』 1971年、7:00
- 創造によるドキュメンタリーの表象の可能性
  - ・ 記録素材への疑義
    - スザンナ・デ・ソウザ・ディアス(Susana de Sousa Dias) 『48』 2010年、93:00
  - ・ 空間による時間の想起
    - エリック・ボードレール(Eric Baudelaire)
      - 『Also Known As Jihadi(ジハーディとしても知られて)』 2017年、102:00
  - ・ 捨象されてきたものへの視線
    - シャンタル・アケルマン(Chantal Akerman)
      - 『ブリュッセル 1080、コメルス河畔通り 23 番地、ジャンヌ・ディエルマン/  
Jeanne Dielman, 23, quai du Commerce, 1080 Bruxelles』 1975年、201:00

-----

#### 主な参考文献:

- アスマン、アライダ著、磯崎康太郎訳(2011)『記憶の中の歴史 個人的経験から公的演出へ』松籟社。
- アスマン、アライダ著、安川晴基訳(2019)『想起の文化 忘却から対話へ』岩波書店。
- 岡本充弘(2013)『開かれた歴史へ - 脱構築のかたにあるもの』御茶の水書房。
- 河本信治編集総括(2009)『ウィリアム・ケントリッジ - 歩きながら歴史を考える』京都国立近代美術館。
- 木下蓮三・木下小夜子(2009)『ピカドン PICA DON』ダイナミックセラーズ出版。(1979年初版、2009年新装改訂初版)
- ダントー、アーサー・C 著、河本英夫訳(1989)『物語としての歴史』国文社。
- トリン、T・ミンハ著、小林富久子訳(1996)『月が赤く満ちる時』みすず書房。
- 野家啓一(2016)『歴史を哲学する』岩波書店。
- ホワイト、ヘイドン著、松原敏文訳(2015)『歴史的な出来事』、岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺賢一郎編『歴史を撃つ』お茶の水書房。
- ホワイト、ヘイドン著、岩崎稔監訳(2017)『メタヒストリー 一九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』作品社。
- モチャルスキ、カジミェシュ著、小原雅俊訳(1983)『死刑執行人との対話』恒文社。
- ローサ、ポール著、厚木たか訳(1976)『ドキュメンタリー映画』未来社。
- Balsom, Erika and Peleg, Hila (2016) "Introduction: The Documentary Attitude," in Erika Balsom and Hila Peleg (eds.), *Documentary Across Disciplines*, Massachusetts, USA: The MIT Press, pp. 10 -19.
- Cristov-Bakargiev, Carolyn (1998) *William Kentridge*, Brussels, Belgium: Societé des Expositions du Palais des Beaux-Arts des Bruxelles.
- DelGaudio, Sybil (1997) "If the truth be told, can 'toons tell it? Documentary and animation," *Film History*, vol.9, no. 22, pp. 189 - 199.
- Grierson, John (1933) "The Documentary Producer," *Cinema Quarterly*, vol. 2, no. 1.
- Honess Roe, Annabelle (2013) *Animated Documentary*, Hampshire, UK: Palgrave Macmillan.
- Murray, Jonathan and Ehrlich, Nea (eds.) (2018) *Drawn from Life: Issues and Themes in Animated Documentary Cinema*, Edinburgh, UK: Edinburgh University Press.
- Noake, Roger (1988) *Animation - A Guide to Animated Film Techniques*, London, UK: Macdonald & Co.
- Richter, Hans (1986) *The Struggle for the Film: Towards a socially responsible cinema*, Hampshire, UK: Wildwood House.
- Rorty, Richard (1975) *The Linguistic Turn: Recent Essays in Philosophical Method*, Chicago, USA: The University of Chicago Press.
- Skoller, Jeffrey (2011) "Introduction to the Special Issue, Making it (Un)real: Contemporary Theories and Practices in Documentary Animation," *Animation: Interdisciplinary Journal*, vol.6, no.3, SAGE Publications, pp. 207 - 214.
- Spiegel, Gabrielle (2005) "Introduction," Id. (ed.), *Practicing History: New Directions in Historical Writing after the Linguistic Turn*, New York, USA: Routledge, pp. 1 - 31.
- Strom, Gunnar (2003) "The Animated Documentary," *Animation Journal*, vol. 11, Georgia, USA: AJ Press, pp. 46 - 63.

Trinh, Minh-ha T. (1993) "The Totalizing Quest of Meaning," in Michael Renov (ed.) *Theorizing Documentary*, New York, USA: Routledge, pp. 90 - 107.

Ward, Paul (2005) *Documentary: The Margins of Reality*, New York, USA: Columbia University Press.

Wells, Paul (1997) "The Beautiful Village and the True Village: A Consideration of Animation and the Documentary," in Paul Wells (ed.), *Art and Animation*, London, UK: Academy Editions, pp. 40 - 45.

長尾真紀子 (2017)「アニメーションにおけるドキュメンテーションの可能性 - アニメーター・ドキュメンタリー研究史を概観して」『女子美術大学研究紀要』第 47 号、pp. 27 - 37。

長尾真紀子 (2018)「出来事の〈概要〉」を提示するアニメーションの可能性: アニメーションと他の表象との比較考察」『女子美術大学研究紀要』第 48 号、pp. 3 - 13。

Makiko Nagao (2019) "The possibility of documentation through animation: A comparative study of the animated short *Pica-Don* and artworks addressing social/historical issues," *Animation Practice, Process & Production*, vol.7 - 1, UK: Intellect, pp. 67 - 87.

長尾真紀子 (2020)『アニメーションによるドキュメンタリー再考』女子美術大学大学院美術研究科 2019 年度博士学位論文。

---

長尾真紀子 Makiko NAGAO

アニメーション制作／普及／研究

ASIFA-JAPAN (国際アニメーションフィルム協会日本支部)事務局長

1985 年、慶應義塾大学文学部卒業。在学中より、アニメーション作家 木下蓮三・木下小夜子が主宰する(株)スタジオロータス入社。木下小夜子の秘書・助手として、主に短編アニメーションの制作、普及、プログラム企画制作、著作権管理等に携わる。国内外の映画祭、美術館、テレビ放映等のアニメーションプログラム制作多数。

スタジオロータス短編作品では、『Made in Japan』(1972 年)、『日本人』(1977 年)、『ピカドン』(1978 年)等の普及活動の他、『ゲバゲバ笑タイム』(1986 年)、『無想』(1988 年)、『最後の空襲くまがや』(1993 年、埼玉県平和資料館常設上映作品)、『ひろしくんは空がすき』(1994 年、芸術文化振興基金助成作品)、『琉球王国 - Made in Okinawa』(2004 年、芸術文化振興基金助成作品)等の制作マネージメントを担当。

アニメーションアート振興のための活動として、広島国際アニメーションフェスティバル(主催:広島市、共催:ASIFA-JAPAN、公認:ASIFA)では、1985 年の第 1 回大会より 2020 年まで、木下小夜子フェスティバル・ディレクター秘書として運営全般に携わり、主に上映／展示プログラム企画制作を補佐。1990 年よりプロジェクト委員、2013 年より大会実行委員も兼任。第 17 回(2018)および第 18 回(2020)大会 国際選考委員。

2005 年以降、ASIFA-JAPAN 主催「国際アニメーション・デー in Japan」も毎年運営。

理論的研究では、ドキュメンタリー概念や、ドキュメンタリーを担うメディアとしてのアニメーションについて、また、広島国際アニメーションフェスティバルを含む文化事業の在り方について考察。

2014 年より女子美術大学大学院芸術表象研究領域にて杉田敦教授に学び、2020 年、博士(美術)学位取得。学位論文「アニメーションによるドキュメンタリー再考」。学術論文に「アニメーションにおけるドキュメンテーションの可能性: アニメーター・ドキュメンタリー研究史を概観して」(女子美術大学研究紀要第 47 号、2017 年)、「出来事の〈概要〉」を提示するアニメーションの潜在的可能性: アニメーションと他の表象との比較考察」(女子美術大学研究紀要第 48 号、2018 年)、「The possibility of documentation through animation: A comparative study of the animated short *Pica-Don* and artworks addressing social/historical issues」(*Animation Practice, Process & Production*, vol.7 - 1, UK, 2019)。口頭発表に、Radboud 大学(オランダ、ナイメーヘン)での国際学会「Animation and Memory」(2017)、研究報告に、「広島国際アニメーションフェスティバル: ASIFA の精神に基づく 36 年の歴史と木下小夜子の実践」(女子美術大学研究紀要第 52 号、2022 年)がある。

Society of Animation Studies (SAS)会員。日本アニメーション学会(JSAS)会員。